



日本計量生物学会 ニュースレター

1. 卷頭言	- 1	7. 2026 年度統計関連学会連合大会のお知らせ	- 5
2. 試験統計家認定制度について	- 2	8. シリーズ「計量生物学の未来に向けて」	- 5
3. 2025 年度理事会議事録	- 2	9. 学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い	- 7
4. 2025 年度 BS ネットワーク報告	- 3	10. 学会誌「計量生物学」の出版状況	- 7
5. 2025 年度統計関連学会連合大会報告	- 4	11. 2026 年度学会賞および功労賞候補者推薦のお願い	- 8
6. 2026 年度日本計量生物学会年会のお知らせ	- 4	12. 編集後記	- 8

1. 卷頭言 「一般社団法人としての学会と規則」

高橋 邦彦（東京科学大学）

本年 9 月、2025 年度統計関連学会連合大会が開催され、参加してきました。会場受付では、セッション会場の地図が印刷された小さな団扇が配布されており、「第 24 回統計関連学会連合大会」と記っていました。統計関連学会連合大会ではあまり「第〇回」という表記は使われないのですが、私は第 1 回にあたる 2002 年度（明星大学）から参加しているため、「もう 24 年も経ったのか」と感慨深く思うと同時に、自分も歳を重ねてきたことを実感しました。

現在の統計関連学会連合大会は、応用統計学会、日本計算機統計学会、日本計量生物学会、日本行動計量学会、日本統計学会、日本分類学会の 6 学会が主催しています。一方で、第 1 回大会の主催団体は本学会を含む 3 学会のみで、そこから徐々に主催学会が増えて現在の形になりました。こうした変遷は統計関連学会連合のホームページ (jfssa.jp) にもまとめられています。また現在では、本学会を含む 3 学会に「一般社団法人（一社）」の表記が付されているほか、6 学会で構成される統計関連学会連合そのものも、2024 年 12 月に一般社団法人として法人化されました。

私自身は、本学会の法人化にあたり会計担当理事として関わり、その後は組織担当理事として法人運営体制の整備に携わってきました。ここでは、法人化の背景やその後の経緯について、私の視点から簡単に振り返ってみたいと思います。

日本計量生物学会は 1980 年 9 月、法人格のない任意団体として設立されました。当時の会員数は 220 名ほどだったそうです。任意団体とは、

町内会やサークル、ボランティア団体などと同じく、共通の目的を持った人々の集まりにすぎませんが、本学会では会則や細則といった規則を整備し、理事会・評議員会・総会といった意思決定機関を設けて、学会運営を行ってきました。

その後、大橋靖雄先生が会長を務められていた時期に、試験統計家認定制度の構想が立ち上りました。しかし任意団体は、法人格を持つ団体に比べ社会的信用度が低いため、認定制度のような社会的事業を行うには懸念が出されました。こうした背景から、学会の法人化が現実的な選択肢として浮上しました。

財務面では、学会事務局と連携しながら一般会計・特別会計の領収書をすべて管理し、毎年、監事による詳細な会計監査を受け、結果を評議員会・総会で報告・承認するなど適切な会計処理を行っていました。しかし任意団体では、法律上、財産は代表者（会長）個人の名義となってしまうため、学会名義で財産管理を行ったりすることができません。当時、会員数は 600 名を超えて、会費収入や運営経費も大きくなっていたことから税務面の課題も生じ、これらを解決するために法人化に踏み切ることになりました。

法人化に向けては、2016 年度総会で法人化方針が承認され、その後、当時の庶務担当理事であった浜田知久馬先生を中心に、司法書士と協力しながら定款の準備が進められました。会計担当理事だった私も、事務局や会計士とともに学会財産の移管準備を担当しました。手続きの関係もあり、2016 年 6 月 23 日に一般社団法人日本計量生物学会が先に設立され、2017 年 3 月 16 日の総会で任意団体の学会を解散し、会員の

所属や財産を法人へ移管することで、現在の法人としての活動が正式にスタートしました。

法人化後は、税務署での手続き等を含め、適切な運営を続けてきましたが、当初の定款では任意団体時代の会則の踏襲を優先していたため、細かな部分で法令との不整合が後から見つかりました。定款の改訂は慎重な対応が求められるため、司法書士の協力も得ながら、松井茂之先生が会長の時期に会長・庶務担当理事・組織担当理事を中心として修正作業を行い、問題を解消しました。

一方、実際の運営を定める細則や内規についても、実情に合わせた整理が必要となり、服部聰先生が会長に就任された後、全面的な改訂が行われました。実際、2024年に実施された評議

員（社員）選出選挙において従来の郵送投票から電子投票へ切り替えるにあたり、関連規則の見直しも行われています。また現在、学会活動や研究発表における COI（利益相反）マネジメントに関する規則の整備についても検討を進めているところです。

来年は法人設立から 10 年目を迎ますが、今後も、法人として法令にしっかりと対応しながら社会的な信頼を確保し、より活発な活動を続けていくために、社会情勢や実情に合わせた規則の整備・改訂が求められます。こうした規則づくりは組織担当理事の重要な役割の一つです。本学会の事業・決算・監査報告、定款・細則などは学会ホームページに掲載していますので、ご確認いただければ幸いです。

2. 試験統計家認定制度について

長谷川 貴大、柴田 大朗、室谷 健太（試験統計家認定担当理事）

2017 年 4 月に開始しました「試験統計家認定制度」では、臨床研究の統計的デザインと解析・統計家の行動基準に関し深い知識を有し、実践している者を、試験統計家 (trial statistician) として認定します。臨床研究の科学的かつ倫理的な質を高めることで人々が有効かつ安全な医療の恩恵を受けること、併せて計量生物学の進歩と発展を目指しています。規則・細則、Q&A、審査基準等の詳細については、学会 HP をご覧ください。

試験統計家は、臨床研究のデザインと解析の科学的・倫理的側面の責任を負う「責任試験統計家」、臨床研究のデザインと解析に関連する実務を行う「実務試験統計家」の 2 種類の区分からなり、2025 年 4 月時点で責任試験統計家 30 名、実務試験統計家 82 名が認定されています。

今後の予定は以下の通りです。

- 2026 年 3 月 : 2025 年度申請分 責任・実務試験統計家認定および更新認定
- 2026 年 5 月～7 月 : 2026 年度 責任・実務試験統計家認定申請受付

・ 2026 年 9 月 : 2026 年度 責任・実務試験統計家更新申請受付

2026 年度の認定申請のためには 2023 年 4 月～2026 年 3 月の間に開催された認定講習会への参加が必須です。なお、認定講習会の 2025 年度日程は全て終了しましたが、2026 年度にも開催予定です。2027 年度以降に認定申請予定で未受講の方・条件を満たしていない方はご参加下さい。詳細は決まり次第お知らせいたします。

すでに試験統計家認定を受けられた方については、更新のために有効期間内（5 年間）に 30 単位が必要です。日本計量生物学会年会・計量生物セミナー・計量生物学講演会については試験統計家認定委員会が発行する単位認定の受講証、それ以外については参加証等の証明書類が認定更新時に必要となりますので保管をお願いいたします。

また、試験統計家認定の更新の申請は、有効期間内または有効期間の満了後 1 年以内に行ってください。

3. 2025 年度理事会議事録

○ 2025 年度 第 4 回対面（Web）理事会

日時 : 2025 年 9 月 4 日（木）17:00～18:35

場所 : Zoom 会議

出席 : 服部、伊藤、大庭、川口、口羽、五所、柴田、島津、寒水、高橋、田栗、手良向、長谷川、船渡川、松井、室谷、横田、山本（監事）、安藤（監事）

寒水 孝司、大庭 幸治（庶務担当理事）

欠席 : 大門

定款第 35 条に従い、定足数を満たしていることを確認した後、定款第 34 条に従い、服部理事を議長として議案を審議した。

審議事項

第1号議案 入会申し込み

5月2日（金）から8月31日（日）の期間に申し込みのあった20名の入会申し込みについて、全員異議なくこれを承認した。

第2号議案 第36回日本疫学会学術総会プレセミナー共催

第36回日本疫学会学術総会プレセミナーを共催することについて、全員異議なくこれを承認した。

第3号議案 IBC2026 Special Network Session の演者選定

1週間を目途に候補者を推薦してもらい、庶務理事と国際理事のサポートのもと、最終的に会長が選出することについて、全員異議なくこれを承認した。

第4号議案 「計量生物学」冊子の廃止

「計量生物学」の冊子（紙媒体）の廃止に向けて、継続的に検討することについて、全員異議なくこれを承認した。

第5号議案 計量生物セミナー

計量生物セミナーの開催日時、開催場所、テーマ、オーガナイザーについて、全員異議なくこれを承認した。

第6号議案 2026年度年会

2026年度年会の開催日時、開催場所について、全員異議なくこれを承認した。ポスターセッションの開催方法については、継続的に検討することになった。

第7号議案 利益相反に関する内規の策定および利益相反委員会の設置

利益相反に関する内規の策定および利益相反

4. 2025年度BSネットワーク報告

伊藤 ゆり、川口 淳、口羽 文、島津 秀康、田栗 正隆、室谷 健太、横田 熱（企画担当理事）

2025年8月29日（金）から30日（土）にかけて、東北大学青葉山キャンパスにて第20回 Biostatistics ネットワーク（BSネットワーク）が開催されました。BSネットワークは、生物統計学分野の学生によるネットワークで、2006年の設立以来、毎年研究集会と懇親会を開催してきました。2025年度からは、日本計量生物学会の事業として、統計数理研究所・医療健康データ科学研究所との共催により実施されることとなりました。

委員会の設置の方針（今後のスケジュール）について、全員異議なくこれを承認した。

報告事項

(1) 庶務関連

退会者、会員種別変更、会員数（8月31日時点）、宛先不明者、（対面・メール）理事会の資料の配布方法が報告された。

(2) 会報関連

148号（2025年8月8日）と149号（2025年12月）の発行予定が報告された。

(3) 編集関連

46巻1号、46巻2号、47巻1号の出版予定と査読の状況が報告された。

(4) 企画関連

2025年度連合大会のシンポジウムと奨励賞受賞者講演の概要、第20回BSネットワークの開催、企画委員会の開催が報告された。BSネットワークに対する学会からの補助額の決定の経緯について確認することになった。

(5) 広報関連

2025年度連合大会で、試験統計家認定制度とIBC2026のポスターを掲示することが報告された。学会HPの「これまでの大会について」のページの情報の整理とBSネットワークの情報を追加することが確認された。

(6) 試験統計家認定関連

試験統計家認定審査（審査基準・手順）、試験統計家認定講習会の予定、日本臨床試験学会第17回学術集会総会のシンポジウム企画の概要、「エストレーラ」9月号特集原稿の発行予定が報告された。



参加者による記念写真

今年度は、全国 13 大学から学生 104 名、教員 31 名の計 135 名が参加し、13 件の研究発表が行われました。学生を中心に質疑応答も盛り上がりいました。特別講演は、東北大学の荒木由布子氏より「Biostatistics および情報科学における関

数データ解析とその周辺」というタイトルで行われました。

学会では、今後も「学生主体」という伝統を大切にしながら、継続的な支援と運営体制の整備を進めていく予定です。学会員の皆様のご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

5. 2025 年度統計関連学会連合大会報告

伊藤 ゆり、川口 淳、口羽 文、島津 秀康、田栗 正隆、室谷 健太、横田 勲（企画担当理事）

2025 年度統計関連学会連合大会は、2025 年 9 月 7 日（日）から 11 日（木）にかけて関西大学およびオンラインのハイブリッド形式で開催されました。本大会、チュートリアルの参加者数は それぞれ 1140 名、288 名でした。日本計量生物学会からは日本計量生物学会奨励賞受賞者講演、日本計量生物学会シンポジウムの 2 つの企画セッションが行われました。

9 月 8 日（月）の午後に、日本計量生物学会奨励賞受賞者講演が行われました。今回の奨励賞受賞者である折原隼一郎氏、黄傲氏より講演がありました。折原氏の「補助変数を利用した操作変数の選択と漸近有効な推定量の構成手順の提案」では、操作変数法における弱操作変数と未観測共変量と関連する変数の混入という 2 つの問題を一度に解決するための方法を提案し、その性能を評価した結果が報告され、今後の展望が示されました。黄氏の「Adjusting for publication bias in meta-analysis via inverse probability weighting using clinical trial registries」では、臨床試験レジストリを活用した逆確率重み付け法によって出版バイアスを調整する手法を提案し、その性能をシミュレーション実験により評価した結果が報告されました。



左から座長の五所正彦氏(筑波大学)、日本計量生物学会奨励賞受賞者の折原隼一郎氏(東京医科大学)、黄傲氏(ゲッティンゲン大学)

6. 2026 年度年会・チュートリアルのお知らせ

伊藤 ゆり、川口 淳、口羽 文、島津 秀康、田栗 正隆、室谷 健太、横田 勲（企画担当理事）

講演後は、活発な質疑で議論が盛り上りました。受賞者である折原氏、黄氏のさらなるご活躍を祈念いたします。

9 月 10 日（水）の午前には、日本計量生物学会シンポジウム「分類問題と機械学習：さまざまな分野・研究者・ユーザーの相互理解を深める」が行われました。シンポジウムの狙いについて山本紘司氏から導入があり、次いで、高橋佳苗氏、林賢一氏、鈴木大慈氏、鈴木達哉氏から講演がありました。講演では、多値分類問題における F1 スコアの理論と活用、生成 AI 研究の進展と医療応用の可能性、data centric AI の考えに基づく社会実装の取り組みなど、様々な分野からの活動が紹介されました。分野ごとの分類モデルの正しさの考え方や信頼性評価の違いなど活発な議論が行われ、異分野の相互理解を深める意義のある機会となりました。



日本計量生物学会シンポジウム講演者

左から、オーガナイザー・座長の世木辰典氏 (GE Healthcare Japan)、高橋佳苗氏(大阪公立大学)、林賢一氏(慶應義塾大学)、鈴木大慈氏(東京大学・理化学研究所)、鈴木達哉氏(ディー・エヌ・エー)、山本紘司氏(横浜市立大学)

2025 年度日本計量生物学会年会およびチュートリアルを、2026 年 5 月 15 日（金）及び 16 日（土）に松江テルサ（<https://www.matsueterra.jp/>）で開催予定です（応用統計学会と共に）。2025 年度も一般公演として口頭発表及びポスター発表を募集する予定ですので、是非とも講演申し込みをご検討下さいますようよろしくお願

いします。今年度も 40 歳未満の若手の正会員・学生会員を対象に「若手優秀発表賞」の表彰を行う予定です。セッションやチュートリアルの内容、講演及び参加申し込み等の詳細については、後日、学会 HP（<https://www.biometrics.gr.jp/>）及びメーリングリストでご案内します。

7. 2026 年度統計関連学会連合大会のお知らせ

坂巻 順太郎、田中 司朗（統計関連学会連合大会プログラム委員）

2026 年度統計関連学会連合大会は、横浜市立大学金沢八景キャンパスにて、9 月 6 日（日）にチュートリアル・市民講演会、9 月 7 日（月）～9 月 10 日（木）に本大会というスケジュールで

開催を予定しています。ぜひご予定おきいただき、皆さまの奮ってのご参加をお願いいたします。

8. シリーズ「計量生物学の未来に向けて」

8.1. 応用と理論の狭間で

私は学部・修士課程で統計学を学び、2019 年に製薬企業に入社しました。そこから約 5 年間、臨床試験の現場に携わりながら、当時創設されたばかりの滋賀大学データサイエンス研究科博士後期課程に進学し、少数試験下でのメタアナリシスの研究に取り組みました。進学当初は退職の予定はありませんでしたが、方法論の研究が次第に面白くなり、博士号取得を機にアカデミアに転職しました。現在は、メタアナリシスを含むデータ統合や過去データの借用に興味をもっており、修士課程までは数学科で過ごしたこともあり、当初は理論寄りの考え方をしていたように思いますが、製薬企業での経験を通じて応用寄りに矯正されたように感じます。今でも応用志向の姿勢が残っており、新しい方法論を提案する際には、すぐに利用できる形に整えるよう心がけています。

製薬業界では、企業で経験を積んだ後にアカデミアへ転身する方が時折いらっしゃいます。私もその一人であり、同様のキャリアパスを歩まれている方を何人も存じ上げています。計量生物学の発展のためには、こうしたキャリアを志向する方が増えることが望ましいのではないかと思います。私自身の製薬企業での経験は 5 年ほどで決して長くはありませんが、統計解析計画書の作成から承認申請時の照会事項対応まで、多岐にわたる業務を経験させて頂きました。多くの場合は、いわばゴールドスタンダードとされる手法を適用すれば十分対応できますが、疾患特性や試験薬の性質、あるいは試験の運用状況に応じて様々な課題が浮かび上がります。

花田 圭祐（和歌山県立医科大学）

試験が進行している中で、これらの課題を統計的立場からすべて解決するのは容易ではありません。制限付き平均生存時間に関するモデル解析法の選択（Hanada et al., 2024）や、非劣性・同等性試験における adaptive randomization の研究（Kojima et al., 2025）は、理論的関心からではなく、実務上の課題意識から生まれた研究です。これらは幸いにも研究として結実しましたが、論文化に至っていない問題も数多くあります。実際の現場では、こうした課題を運用で補う、あるいは多少の違和感を受け入れながら業務を進めることも少なくありません。こうした課題の解決を諦めきれず、研究として取り組みたいと考えた人が、企業からアカデミアへ転職するのかもしれません。

一方で近年は、製薬企業内で方法論の研究を進める方も増えてきています。この動きは、ICH-E9（R1）の発出前後から特に顕著になったように感じます。臨床試験などの実際の課題を出発点として研究を進められる点で、この潮流は計量生物学の未来にとって非常に意義深いものだと思います。私自身、アカデミアに移ってまだ 2 年目ですが、臨床試験現場で直面するような課題に出会う機会は少なくなりました。現場の課題が計量生物学の論文として形になるまでには時間がかかり、解決されないまま忘れ去られてしまうことも少なくありません。一方で、アカデミアの理論研究者も応用の題材を探しており、現場で生じる「生の課題」に関心を持っています。実データを共有することは容易ではありませんが、問題設定や課題意識を共有し、研究と

して協働できれば、理論と応用の両側面から有用な方法論を生み出せるのではないかと考えています。

最後に、この度は若手研究発表賞を賜り、心より感謝申し上げます。受賞対象となった研究は、メタアナリシスの結果を借用して臨床試験を設計・解析する方法論であり、まさに製薬企業時代に抱いた問題意識を出発点としたものです。一方で理論的には線形混合モデルを対象としており、拡張の余地は大きいです。今後も、応用と理論の狭間で格闘しながら、計量生物学の発展に微力ながら貢献していければと考えております。

8.2. 生物統計学と生物統計家に出会って

私の生物統計学との出会いは遅く、計量生物学会の会員になったのも比較的最近のことです。そのような中でこのシリーズに参加させていただくのは恐れ多いという気もするのですが、依頼を受けたのだからと割り切って、これまでを振り返りつつお伝えできることを模索していくことにします。

私が最初に統計学の研究室に所属したのは大学院生のときです。数理統計学の中でもやや特殊な計算代数統計学という分野で研究をしていました。当時の関心は統計学自体というよりも統計モデルに付随する数理構造の方にあり、統計学の実践という観点への意識は低かったと言わざるを得ません。それでも研究を続けていくうちに、統計学としての意義と自身の研究内容とを見比べた際の違和感が無視できなくなっていました。博士課程修了から最初の職場に在籍していた頃は中長期的な方向性を悩ましく思うことが増えていました。

転機となったのは二つ目の職場である東京大学大学院情報学環への異動です。いくつかの偶然も重なり、同大学院学際情報学府に新設される生物統計情報学コースの教員として異動し、そこで初めて生物統計学や生物統計家とよばれる方々との関わりが生じました。生物統計情報学コースは実務家としての生物統計家の育成を目的として設立されたコースのため、コース教員としても生物統計学の実務経験が豊富な先生方を中心に構成されていました。統計学の数理的側面に主な関心があるのは私一人という状況でした。それまでの研究上の関わりが数理統計学や応用数学のコミュニティに属する方々に偏っていた私としては、学術的な関心から慣習面に至るまで様々な違いがあり、戸惑うこともありました。

私の在籍時の生物統計情報学コースは修士課程のみで、修了後は基本的にはアカデミアの生物

す。

参考文献

- 1) Hanada, K., Moriya, J., & Kojima, M. (2024). Comparison of baseline covariate adjustment methods for restricted mean survival time. *Contemporary Clinical Trials*, 138, 107440.
- 2) Kojima, M., Mano, H., Yamada, K., Hanada, K., Tanaka, Y., & Moriya, J. (2025). Adjusting confidence intervals under covariate-adaptive randomization in non-inferiority and equivalence trials. *Contemporary Clinical Trials*, 108099.

小川 光紀（東京医科大学）

統計家（実務家）として活躍することが期待される特徴的なコースでした（本稿執筆時の2025年度は、来年度に博士課程が新設される過渡期に当たります）。カリキュラム構成も実務家養成が明確に意識されており、生物統計学に関わる広範なトピックを、特に実務の観点を重視して網羅的に学べるよう設計されています。直接対応する学部を学内にもたないコースのため、入学してくる学生の背景は多様です。

生物統計情報学コースには長くお世話になつたのですが、そこでの経験や刺激は現在の私の統計学というものの捉え方に大きく影響しています。元々は統計学の数理的側面に関心があり、様々な応用分野の特にどれにという興味がもてずにいた私にとって、応用先がある程度固定された生物統計学に特化した環境に放り込まれたことは非常に大きかったです。数理統計学者も応用分野をもつとよい、といった言説は時々耳にするのですが、今では実感を伴って強く同意できます。特に、生物統計学という領域は、応用先が明確であるだけでなく、理論や方法論の研究という観点からも、洗練された数学が必要な問題から込み入った数学を必要としない実践的問題まで様々な研究に意義があり、奥深さと幅広さをあわせもつ魅力的な分野であると感じます。

生物統計情報学コースには、実務だけでなく生物統計学そのものの研究に強い意欲をもつ学生も一定数いました。実務と研究は生物統計学の発展における両輪と思いますが、コース自体が実務家養成に照準を合わせて設計されていることもあり、生物統計学自体の研究者を育てる、という観点ではどのようなスタンスで臨むべきか難しく感じることがしばしばありました。修士の2年間という限られた時間の中ではありますが、修了後も含めて成長の糧になればと願いつつ、現在の職場に移ってからも、非常勤で一部の講義の担当

を継続しながら試行錯誤を続けています。

私は現在、東京医科大学の医療データサイエンス分野に所属し、引き続き研究教育業務に従事しています。現所属では、生物統計学の基礎としての数理統計と疫学・臨床研究における生物統計学の実践の両面を重視することが研究室の指針になっていると感じます。教員・学生ともにバックグラウンドは多様で、学術的な軸足の取り方も様々ですが、それぞれの強みを活かしつつ、関連領域への理解も深めていこうという空気感があり、教員の立場でありながら私自身も様々なことに気付かされる毎日です。

理論から実践まで幅広い立場からの取り組み

に意義があるという懐の深さは、生物統計学という学問分野が元来もっている魅力の一つだと思います。しかし、それが前面に発揮される環境は勝手に出来上がるものでは必ずしもなく、一人一人が広い視野への意識と隣接分野への敬意をもつことで初めて実現できるのだろうと感じています。代数統計学という現状の生物統計学からは遠い地点から研究活動をスタートし、偶然（幸運？）も手伝って生物統計分野に関わりをもつようになつた私としては、分野が元来もつ懐の深さを活かした発展に少しでも貢献できるよう、試行錯誤を続けていく所存です。

9. 学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い

本学会雑誌である「計量生物学」に会員からの積極的な投稿を期待しています。会員のためになる、会員相互間の研究交流をより一層促進するための雑誌をめざすため、以下の5種類の投稿原稿が設けてあります。

1) 原著 (Original Article)

計量生物学分野における諸問題を扱う上で創意工夫をこらし、理論上もしくは応用上価値ある内容を含むもの。

2) 総説 (Review)

あるテーマについて過去から最近までの研究状況を解説し、その現状、将来への課題、展望についてまとめたもの。

3) 研究速報 (Preliminary Report)

原著ほどまとまつてないがノートとして書き留め、新機軸の潜在的な可能性を宣言するもの。

4) コンサルタント・フォーラム (Consultant's Forum)

会員が現実に直面している具体的問題の解決法などに関する質問。編集委員会はこれを受けて、適切な回答例を提示、または討論を行う。なお、質問者（著者）名は掲載時には匿名も可とする。

5) 読者の声 (Letter to the Editor)

雑誌に掲載された記事などに関する質問、反論、意見。

論文投稿となると、「オリジナリティが要求される」、「日常業務での統計ユーザーにとっては敷居が高い」などを理由に二の足を踏む会員が多いかもしれません、上記の「研究速報」、「コン

五所 正彦、川口 淳（編集担当理事）

サルタント・フォーラムは、そのような会員のために設けられた場であり、活発に利用されることを特に期待しています。いずれの投稿論文も和文・英文のどちらでも構いません。

2004年度から学会に3つの賞が設けられ、その一つである奨励賞は、「日本計量生物学会誌、Biometrics, JABES, IBS Region の雑誌（例えばBiometrical Journal）に掲載された論文の著者（単著でなくとも第1著者かそれに準ずる者）で原則として40歳未満の本学会の正会員または学生会員を対象に、毎年1名以上に与えられる賞」です。最近は、履歴書の賞罰欄に「なし」と書くと公募の際に引け目を感じるくらいです。ここ数年、「計量生物学」に掲載された論文が受賞しており、今後もこの傾向は続くものと見込まれます。特に、上記の条件を満たす方は、ご自身の研究成果の投稿先として「計量生物学」を積極的に検討されてはいかがでしょうか。

また、特に最近の計量生物学の研究に関しては、英語の総説はあっても、日本語で書かれたよい総説・解説が存在しない分野やテーマが多く見受けられます。日本語での総説論文は、多くの会員に有益な情報を提供すると同時に大変貴重なものになりますので、その投稿は大いに歓迎されます。

これまで著者から論文掲載料をいたしましたが、会員が筆頭著者の場合は無料とすることになりました。2013年発行の34巻1号からこれを適用しています。

なお、論文の投稿に際しては、論文の種類を問わず、雑誌「計量生物学」に記載されている投稿規程をご参照ください。会員諸氏の意欲的な論文投稿を心よりお待ちしております。

10. 学会誌「計量生物学」の出版状況

2025年11月に「計量生物学」46巻2号を発行しました。今回の掲載論文は以下の通りです。詳細は <https://www.biometrics.gr.jp/journal/index.html> をご覧ください。

総説

- ・日本の医療リアルワールドデータの課題と展望

弘 新太郎

五所 正彦, 川口 淳 (編集担当理事)

- ・測定の信頼性とその評価 – 特に級内相関係数と κ 係数について –

大山 哲司

- ・欠測と測定誤差: データの不完全性に対処する統計アプローチ

古川 恭治・熊野 夏海
川添 百合香・中倉 章祥

- ・アンサンブル木モデルと Shapley Additive Explanation を用いたリアルワールドデータ解析の理論と実践

野原 康伸

11. 2026年度学会賞および功労賞候補者推薦のお願い

松井 茂之, 手良向 聰 (学会賞担当理事)

一般社団法人日本計量生物学会は、学会賞、功労賞および奨励賞の3つの賞を授与しています。学会賞と功労賞の受賞候補者は、会員の皆様により推薦いただき、学会賞選定委員会にて受賞者を推薦します。学会賞受賞者は理事会の承認により、功労賞受賞者は理事会での協議のうえ社員総会の承認により決定されます。

今年度も会員の皆様に学会賞および功労賞の推薦をお願いする時期となりました。自薦、他薦いずれも受け付けますので、宜しくご推薦をお願い申し上げます。

学会賞および功労賞の対象者は以下の通りです。

- ・学会賞：顕著な研究成果を発表した学会員に対する賞
- ・功労賞：本学会への貢献が大きかった学会員に対する賞

学会賞、功労賞いずれも下記の様式により学会賞選定委員会宛に郵送または電子メールにてお送りください。受賞者の発表と表彰は4月の会員総会で行います。いずれの賞もニュースレターな

どで受賞理由を公表いたします（推薦者は非公表です）。

推薦書の様式：A4版1枚に、日本計量生物学会賞または功労賞推薦書と14ポイントで書き、本文は10.5ポイントで以下の内容をご記入下さい。資料の添付等は自由です。

- 1) 被推薦者氏名、所属、連絡先（住所、電話、e-mail）
- 2) 推薦理由（略歴含む）
- 3) 推薦期日
- 4) 推薦者氏名（複数の場合は全員）
- 5) 推薦者（複数の場合は代表者）の所属および連絡先（住所、電話、e-mail）

推薦締め切り期日：2026年1月31日（必着）

推薦書送付先：〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6 能楽書林ビル5階

（財）統計情報研究開発センター内

一般社団法人 日本計量生物学会事務局 学会賞選定委員会

メールアドレス：biometrics@sinfonica.or.jp

12. 編集後記

第33回 International Biometric Conference (IBC2026) が7月12~16日に韓国のソウルで開催されます。奮ってご参加ください。

行く年を惜しみつつ、来る年を折り数える年の暮れとなりました。皆様どうぞご自愛ください。
(101年目の冬を迎えた甲子園球場より)

日本計量生物学会会報第149号
2025年12月5日発行

発行者：日本計量生物学会
発行責任者：服部聰 編集者：田栗正隆、大門貴志